日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第十五卷

河出書房版

現代日本小説大系　第十五卷

昭和二十七年五月二十五日　初版印刷
昭和二十七年五月三十日　初版發行

定價　貳百參拾圓
地方定價　貳百四拾圓

著者代表　小川未明

東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
發行者　河出孝雄

東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
日本近代文學研究會
編集者　青野季吉

東京都品川區大井寺下町一四三〇番地
印刷者　小田茂作

發行所　東京都千代田區神田小川町三ノ八　株式會社　河出書房
振替東京一〇八〇二番
電話神田(25)三二七四番

東日本印刷株式會社印刷

目次

上司小劍
鱧の皮……四
木像……一七
田村俊子
木之伊の口紅……一〇九
中村星湖
少年行……一四一

小川未明
魯鈍な猫……二一
加能作次郎
恭三の父……二五八
厄年……二六七
解説（青野季吉）……三〇三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

上司小劍

鱧の皮

木像

鰻の皮

一

郵便配達が巡査のやうな靴音をさして入つて來た。

「福島磯……といふ人が居ますか。」

彼れは焦々した調子でかう言つて、束になつた葉書や手紙の中から、赤い印紙を二枚貼つた封の厚いのを取り出した。

道頓堀の夜景は丁どこれから、といふ時刻で、筋向うの芝居は幕間になつたらしく、讃岐屋の店は一時に立て込んで、二階からの通し物や、芝居の本家や前茶屋からの出前で、銀場も板場もテンテコ舞をする程であつた。

「福島磯……此處だす、此處だす。」と、忙しいお文は、銀場から白い手を差し出した。男も女も、襷がけでクル〳〵と郵便配達の周圍を廻つてゐるけれども、お客の方に夢中で、誰れ一人女主人の爲めに、郵便配達の手から厚い封書を取り次ぐものはなかつた。

「標札を出しとくか、何々方としといて貰はんと困るな。」

怖い顔をした郵便配達は、かう言つて、一間も此方から厚い封書を銀場へ投げ込むと、クルリと身體の向を變へて、靴音荒荒しく、板場で燒く鰻の匂を嗅ぎながら、暖簾を潜つて去つた。

四十人前といふ前茶屋の大口が燒き上つて、二階の客にも十二組までお變そ（勘定の事）を濟ましたので、お文は漸く膝の下から先刻の厚い封書を取り出して、先づ其の外形からつく〴〵見た。手蹟には一目でそれと見覺えがあるが、出した人の名はなかつた。消印の「東京中央」といふ字が不明瞭ながらも、兎も角讀むことが出來た。

「何や、阿呆らしい。……」

小さく獨り言をいつて、お文は厚い封書を其のまゝ銀場の金庫の抽斗に入れたが、暫くしてまた取り出して見た。さうして封を披くのが怖ろしいやうにも思はれた。

「福島磯……私が名前を變へたのを、何うして知つてるのやろ、不思議やな。叔父さんが知らしたのかな。」

お文はかう思つて、またつく〴〵と厚い封書の宛名の字を眺めてゐた。

河岸に沿うた裏家根に點けてある、「さぬきや」の文字の現れた廣告電燈の色の變る度に、お文の背中は、赤や、青や、紫や、硝石障子に映るさま〴〵の光に彩られた。

一しきり立て込んだ客も、二階と階下とに一組づつゐるだけになつた。三本目の銚子を取り換へてから小一時間にもなる二階の二人連れは、勘定が危さうで、雇女は一人二人づつ、抜き足して階子段を上つて行つた。

二

新まいの雇女にお客と間違へられて、お文の叔父の源太郎が

入つて來た。

「お出でやアす。」と、新まいの女の叫んだのには、一同が笑つた。中には腹を抱へて笑ひ崩れてゐるものもあつた。

「をッさん、えゝとこへ來とくなはつた。今こんな手紙が來ましたのやがな。獨りで見るのも心持がわるいよつて、電話かけて、をッさん呼ばうと思うてましたのや。」

お文は女どものゲラ〳〵とまだ笑ひ止まぬのを、見向きもしないで、銀場の前に立つた叔父の大きな身體を見上げるやうにして、かう言つた。

「手紙テ、何處からや。……福造のところからやないか。」

源太郎は年の故で稍曲つた太い腰をヨタ〳〵させながら、銀場の横の狹い通り口へ一杯になつて、角帶の小さな結び目を見せつゝ、背後の三疊へ入つた。

其處には簞笥やら蠅入らずやら、さま〳〵の家具類が物置のやうに置いてあつて、人の坐るところは疊一枚ほどしかなかつた。其の狹い空地へ大きく胡坐をかいた源太郎は、五十を越してから始めた煙草を無器用に吸はうとして、腰に挿した煙草入を拔き取つたが、火鉢も煙草盆も無いので、煙草を詰めた煙管を空しく弄りながら、對う河岸の美しい灯の影を眺めてゐた。對う河岸は宗右衞門町で、何をする家か、灯がゆら〳〵と動いて、それが、螢を踏み蹂躙つた時のやうに、キラ〳〵と河水に映つた。初秋の夜風は冷々として、河には漣が立つてゐた。

「能う當りましたな。……東京から來ましたのや。……これだす。」

勘定の危まれた二階の客の、銀貨銅貨取り混ぜた拂ひを檢めて、それから新らしい客の通した麥酒と鮒の鐵砲和とを受けてから、一寸の閉を見出したお文は、後を向いてかう言つた。彼女の手には厚い封書があつた。

「さうか、矢ッ張り福造から來たんか、何言うて來たんや。……また金送れか。分つてるがな。」

源太郎は眼をクシャ〳〵さして、店から射す灯に透しつゝ、覗くやうに封書の表書を讀まうとしたが、暗くて判らなかつた。

「をッさんに先き讀んで貰ひまへうかな。……私まだ封開けまへんのや。」

かうは言つてゐるものの、封書は固くお文の手に握られて、源太郎に渡さうとする容子は見えなかつた。

「お前、先きい讀んだらえゝやないか。……お前とこへ來たんやもん。」

「私、何や知らん、怖いやうな氣がするよつて。」

「阿呆らしい、何言うてるのや。」

冷笑を鼻の尖頭に浮べて、源太郎は煙の出ぬ煙管を弄り廻してゐた。

「そんなら、私、そッちへいて讀みますわ。……をッさん、一寸銀場を代つとくなはれ、あのまむしが五つ上ると、金太に魚槽を見にやつとくなはれ。……金太えゝか。」

氣輕に尻を上げて、お文は叔父と板前の金太とに物を言ふと、厚い封書を握つたまゝ、薄暗い三疊へ入つた。

「よし來た、代らう。……どッこいしよ。」と、源太郎は太い腰を浮かして、煙管を右の手に、煙草入を左の手に摑んで、お文

と入れ代りに銀場へ坐つた。

豆絞りの手拭で鉢巻をして、すら〳〵と機械の廻るやうな手つきで鰻を裂いてゐた板前の金太は、チラリと横を向いて源太郎の顔を見ると、にッこり笑つた。

「ここへも電氣點けんと、どんならんなア。阿母アはんは儉約人やよつて、點けえでもえゝ、と言やはるけど、暗うて仕樣がおまへんなをッさん。……二十八も點けてる電氣やもん。五燭を一つぐらゐ殖やしたかて、何んでもあれへん、なアをッさん。」

がらくたの載つてゐる三疊の棚を、手探りでガタゴトさせながら、お文は聲高に獨り言のやうなことを言つてゐたが、やがてパッと燐寸を擦つて、手燭に灯を點けた。

河風にチラ〳〵する蠟燭の灯に透かして、一心に長い手紙を披げてゐる、お文の肉附のよい横顔の、白く光るのを、時々振り返つて見ながら、源太郎は、姪も最う三十六になつたのかなアと、染々さう思つた。

毛絲の辨當囊を提げて、「福島さん學校へ」と友達に誘はれて小學校へ通つてゐた姪の後姿を毎朝見てゐたのは、ツイ此頃のことのやうに思はれるのに、と、源太郎はまださう思つて、婿養子を貰つた婚禮の折の外は、一度も外の髮に結つたことのない、お文の新蝶々を、俯いて家出した夫の手紙に讀み耽つてゐるお文の頭の上に見てゐた。其の新蝶々は、震へるやうに微かに動いてゐた。

「何んにも書いたらしまへんがな。……長いばッかりで。……病氣で困つてるよつて金送れと、それから子供は何うしてるちふことと、……今度といふ今度は懲り〳〵したよつて、あやまるさかい元の鞘へ納まりたいや、……決つてるのや。」

口では何んでもないやうに言つてゐるお文の眼の、異樣に輝いて、手紙を見詰めてゐるのが、蠟燭の光の中に淡く見出された。

「まアをッさん、讀んで見なはれ。面白おまッせ。」

氣にも止めぬといふ風を見せようとして、態とらしい微笑を口元に浮べながら、殘り惜しさうに手紙を其處に置き棄てゝ、お文は立ち上ると、叔父の背後に寄つて、無言で銀場を代らうとした。

「どッこいしよ。」と、源太郎はまた重さうに腰を浮かして、手燭の點けッぽなしになつてゐる三疊へ、大きな身體を這ひ込むやうにして坐つた。煙管はまだ先刻から一服も吸はずに、右の手へ筆を持ち添へて握つてゐた。

「をッさん、筆……筆。」と、お文は銀場の筆を叔父の手から取り戻して、懶怠さうに、叔父の肥つた膝の溫味の殘つた座蒲團の上に坐ると、出ないのを無理に吐き出すやうな欠伸を一つした。

源太郎は、蠟燭の火で漸と一服煙草を吸ひ付けると、掃除のわるい煙管をズウ〳〵音させて、無恰好に煙を吐きつゝ、だらしなく披げたまゝになつてゐる手紙の上に眼を落した。

「其の表書なア、福島殿といふのを知つてるのが不思議でなりまへんのや。」

手紙を三四行讀みかけた時、お文がこんなことを言つたので、源太郎は手紙の上に俯いたなりに、首を捻ぢ向けて、お文

の方を見た。

「福造の居よる時から、さう言うてたがな、お文よりお磯の方がえゝちうて、福島と島やさかい、磯と文句が續いてえゝと、私が福造に言うてたがな。……それで書いて來よつたんや。われの名も福島福造……は福があり過ぎて悪いよつて、福島理記といふのが、劃の數が良いさかい、理記にせいと言うてやつたんやが、さう書いて來よれへんか。……私んとこへおこしよつたのには、ちやんと理記と書いて、宛名も福島照久樣としてよる。源太郎とはしよらへん。」

好きな姓名判斷の方へ、源太郎は話を總て持つて行かうとした。

「やゝこしおますな、皆んな名が二つづつあつて。……けど福造を理記にしたら、少しは增しな人間になりますか知らん。」

世間話をするやうな調子を裝うて、お文は家出してゐる夫の判斷を聞かうとした。

「名を變へてもあいつはあかんな。」

そッ氣なく言つて、源太郎は身體を眞ッ直ぐに胡坐をかき直した。お文はあがつた蒲燒と玉子燒とを一寸檢めて、十六番の紙札につけると、雇女に二階へ持たしてやつた。

「この間も、選名術の先生に私のことを見て貰うた序に聞いてやつたら、福島福造といふ名と四十四といふ年を言うただけで、先生は直きに、『この人はあかんわい、放蕩者で、其の放蕩は一生止まん。止む時は命數の終りや。性質が薄情殘酷で、これから一寸頭を持ち上げることはあつても、また失敗して、そんなことを繰り返してる中にだん〳〵悪い方へ塡つて行く』と言やはつたがな。ほんまに能う合うてるやないか。」

到頭詰まつて了つた煙管を下に置いて、源太郎は沈み切つた物の言ひやうをした。お文は聞えぬ振りをして、板場の方を向いたまゝ、厭な厭な顏をしてゐた。

三

源太郎がまた俯いて、讀みかけの長い手紙を讀まうとした時、下の河中から突然大きな聲が聞えた。

「おーい、……おーい……讚岐屋ァ。おーい、讚岐屋ァ。」

重い身體を、どッこいしよと浮かして、源太郎が腰硝子の障子を開け、水の上へ架け出した二尺の濡れ緣へ危さうに片足を踏み出した時、河の中からはまた大きな聲が聞えた。

「おーい、讚岐屋ァ。……鰻で飯を二人前呉れえ。」

「へえ、あの……」と、變な返事をして、源太郎は河の中を覗き込んだが、色變りの廣告電燈が眩しく映るだけで、黑く流れた水の上のことは能く分らなかつた。

「をッさん、をッさん。」と、お文の聲が背後から呼ぶので、銀場を振り返ると、お文は兩手を左の腰の邊に當てて、長いものを横たへた身振りをして見せた。

「あゝ、サーベルかいな。」

漸く合點の行つた源太郎は、小さい聲でかうお文に答へて、

「へえ、今直きに拵へて上げます。」と、黑い水の上に向つて叫んだ。

「さうか、早くして呉れ。」といふ聲の方を、瞳を定めてヂッと見下すと、眞下の石垣にぴッたりと糊付か何かのやうにくッ付

いて、薄暗く油煙に汚れた赤い灯の點いてゐる小さな舟の中に、白い人影がむく〳〵と二つ動いてゐた。其の白い人影の一つが急に黑くなつたのは、外套を着たのらしかつた。

通し物の順番を追はずに、板前を急がせた水の上からの註文は直ぐ出來て、別に添へた一品の料理と香の物、茶瓶なぞとともに、こんな時の用意に備へてある長い綱の付いた平たい籠に入れて、源太郎の手で水の上へ手繰り下された。

「サンキュー。」と、妙な聲が水の上から聞えたので、源太郎は馬鹿々々しさうに微笑を漏らした。

雇女が一人三疊へ入つて來て、濡れ緣へ出て對岸の紅い灯を眺めながら、欄干を叩いて低く喇叭節を唄つてゐたが、藪から棒に、

「上町の旦那はん、……八千代はん、えらうおまんな。この夏全で休んではりましたんやな。……もう出てはりますさうやけど、お金もたんと出來ましたんやろかいな。」と、源太郎に向つて言つた。

隨一の名妓と唄はれてゐる、富田屋の八千代の住む加賀屋といふ河沿ひの家のあたりは、對岸でも灯の色が殊に鮮かで、調子の高い撥の音も其の邊から流れて來るやうに思はれた。空には星が一杯で、黑い河水に映る兩岸の灯と色を競ふやうであつた。

名妓の噂を始めた縮れ毛の、色の黑い、足の大きな雇女は、源太郎が何とも言はぬので、また欄干を叩いて喇叭節をやり出した。

手紙を前に披げて、ヂッと腕組をしてゐた源太郎は、稍暫くしてから、空になつた食器が籠に入つて雇女の手で河の中から迫り上つて來たのを見たので、突然銀場の方を向いて、

「これ、何んぼになるんやな。」と頓狂な聲を出した。

「よろしおますのやがな、お序の時に、とさう言はしとくなはれ。」

算盤を彈きながら、お文が向うむいたまゝで言つたのと、殆んど同時に、總てを心得てゐる雇女は、濡れ緣から下を覗き込んで、

「よろしおます、お序の時で。」と高く叫んだ。水の上からも何か言つてゐるやうであつたが、意味は分らなかつた。やがて、赤い灯の唯一つ薄暗く煤けて點いてゐる小舟は、音もなく黑い水の上を滑つて、映る兩岸の灯の影を亂しつつ、暗の中に潜き去つた。

四

腕組をして考へてゐた源太郎は、また俯いて長い手紙に向つた。さうして今度は口の中で低く聲を立てて讀んでゐたが、讀み終るまでに、稍長いことかゝつた。

お文は銀場から、其の鋭い眼で入り代り立ち代る客を送り迎へして、男女二十八人の雇人を萬遍なく立ち働かせるやうに、心を一杯に張り切つてゐた。夜の更けようとするに連れて、客の足はだん〳〵繁くなつた。暖簾を揭げた入口から、丁字形に階下の間と二階の階子段とへ通ふ三和土には、絶えず水が撒かれて、其の上に履物の音が引ッ切りなしに響いた。

これから芝居の閉場る前頃を頂上として、それまでの一戰

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と、お文は立つて帶を締め直したが、時々は背後を振り向いて、手紙を讀んでゐる叔父の氣配を窺はうとした。

「二十圓送れ……と書いてあるやないか。」と、源太郎は眼をクシャ〳〵さしてお文の方を見た。

「さうだすな。」と、お文は輕く他人のことのやうに言つた。

「福造の借錢は、一體何んぼあるやらうな。」

疊みかけるやうにして、源太郎が言つたので、お文は忙しい中で胸算用をして、

「千圓はおますやらうな。」と、相變らず世間話のやうに答へた。

「この前に出よつた時は千二百圓ほど借錢をさらすし、其の前の時も彼れ是れ八百圓はあつたやないか。……今度の千圓を入れると、三千圓やないか。……高價い養子やなア。」

自然と皮肉な調子になつて來た源太郎の言葉を、お文は忙しさに紛らして、聞いてはゐぬ風をしながら、隅の方の暗いところでコソ〳〵話をしてゐる男女二人の雇人を見付けて、

「留吉にお鶴は何してゐるんや。この忙しい最中に、……これだけの人數が喰べて行かれるのは、商賣のお蔭やないか。商賣を粗末にする者は、家に置いとけんさかいな、ちやッちやと出ていとくれ。」と、癇高い聲を立てた。男女二人の雇人は、雷に打たれたほどの驚きやうをして、パッと左右に飛んで立ち別れた。

「味醂屋へまた二十圓貸ぜちうて來たんやないか。……味醂屋にはこの春家出する時三十圓借りがあるんやで。能うそんな厚かましいことが言はれたもんやな。」

何處までも追つかけるといつた風に、源太郎は、福造の棚卸をお文の背中から浴びせた。

「味醂屋どこやおまへん。去年家にゐて出前持をしてたあの久吉な、今島の内の丸利にゐますのや。あそこへいて、この春久吉に一圓借せと言ひましたさうだッせ。困つて來ると、恥も外聞も分りまへんのやなア。」

また世間話をするやうな、何氣ない調子に戻つて、お文は背後を振り返り〳〵、叔父の言葉に合槌を打つた。

「味醂屋や酒屋や松魚節屋の、取引先へ無心を言うて來よるのが、一番强腹やな。……何んぼ借して呉れんやうに言うといても、先方では若し福造が戻つて來よるかと思うて、厭々ながら借すのやが、無理もないわい。若しも戻つて來よると、讃岐屋の旦那はんやもんな。其の時復讐をしられるのが辛いよつてな。取引先も考へて見ると氣の毒なもんや。」

染々と同情する言葉つきになつて、源太郎は太い溜息を吐いた。

「饂飩屋に丁稚をしてた時から、四十四にもなるまで、大阪に居ますのやもん、生れは大和でも、大阪者と同じことだすよつてな。私等の知らん知人もおますよつて、あゝやつて東京へほつたらかしとくと、其處ら中へ無心狀を出して、借錢の上塗をするばかりだす。困つたもんやなア。」

漸く他人のことではないやうな物の言ひ振りになつて、お文は廣く白い額へ青筋をピク〳〵動かしてゐた。

「あゝ、『鱧の皮を御送り下されたく候』と書いてあるで。……何吐かしやがるのや。」と、源太郎は長い手紙の一番終りの小さ

な字を讀んで笑つた。

「鱧の皮の二杯酢が何より好物だすよつてな。……東京にあれおまへんてな。」

夫の好物を思ひ出して、お文の心はさま〴〵に亂れてゐるやうであつた。

「鱧の皮、細う切つて、二杯酢にして一晩ぐらゐ漬けとくと、溫飯に載せて一寸いけるさかいな。」と、源太郎は長い手紙を卷き納めながら、暢氣なことを言つた。

五

堺の大濱に隱居して、三人の孫を育ててゐるお梶が、三歳になる季の孫を負つて入つて來た。

「阿母アはん、好いとこへ來とくなはつた。をッさんも來てはりますのや。」と、お文は嬉しさうな顏をして母を迎へた。

「お家はん、お出でやす。」と、男女の雇人中の古參なものは口口に言つて、一時「氣を付けッ」といつたやうな姿勢をした。

「あばちやん、ばア。母アちやん、ばア。ぢいちやん、ばア。」と、お梶は歌のやうに節を付けて背中の孫に聞かせながら、ズウッと源太郎の胡坐をかいてゐる三疊へ入つて行つた。

背中から下された孫は、母の顏を見ても、大叔父の顏を見ても、直ぐベソをかいて、祖母の懷に嚙り付いた。

「あゝ辛度や。」と疲れた狀をして、薄くなつた髮を引ッ詰めに結つた、小さな新蝶々の崩れを兩手で直したお梶は、忙しさうに孫を抱き上げて、萎びた乳房を弄らしてゐた。

「其の子が一番福造に似てよるな。」と、源太郎は重苦しさうな物の言ひやうをして、つく〴〵と姉の膝の上の子供を見てゐた。

「性根まで似てよるとお仕舞ひや。」

笑ひながらお梶は、萎びた乳房を握つてゐる小さな手を竊と引き離して襟をかき合はした。孫は漸く祖母の膝を離れて、氣になる風で大叔父の方を見ながら、細い眼尻の下つた平ッたい色白の顏を振り〳〵、ヨチ〳〵と濡れ緣の方に歩いた。

「男やと心配やが、女やよつて、まア安心だす。」

戰場のやうに店の忙しい中を、お文は銀場から背後を振り返つて、厭味らしく言つた。

それを耳もかけぬ風で、お梶は弟の前の煙管を取り上げて、一服吸はうとしたが、煙管の詰まつてゐるのに顏を顰めて、

「をッさん、また詰まつてるな。素人の煙草呑みはこれやさかいな。」と、俯いて紙捻を拵へ、丁寧に煙管の掃除を始めた。

「福造から手紙が來たある。……一寸讀んで見なはれ。」と、源太郎は厚い封書を姉の前に押しやつた。

「それ、福造の手紙かいな。……私はよッぽど今それで煙管掃除の紙捻を拵へようかと思うたんや。」

封書を一寸見やつただけで、お梶は顏を顰め顰め、毒々しい黑い脂を引き摺り出して煙管の掃除を續けた。

「まア一寸でよいさかい、其の手紙を讀んどくなはれ。それを讀まさんことにや話が出來まへん。」

「福造の手紙なら讀まんかて大概分つたるがな。……眼がわるいのに、こんな灯で字が讀めやへん。何んならをッさん、讀んで聞かしとくれ。」

煙管を下に置いて、巧みな手つきで短くなつた蠟燭のシンを切つてから、お梶はスパ〳〵と快く通るやうになつた煙管で、可味さうに煙草を吸つて、濃い煙を吐き出した。源太郎は自分よりも上手な煙草の吸ひやうを感心する風で、姉の顔を見つめてゐた。

孫はまた祖母の膝に戻つて、萎びた乳も弄らずに、罪のない顔をして、すや〳〵と眠つて了つた。

「福造の手紙を讀んで聞かすのも、何んやら工合がわるいが、……ほんなら中に書いてあることをざつと言うて見よう。」

源太郎はかう言つて、構へ込むやうな身體つきをしながら、

「まア何んや、例もの通り無心があつてな。……今度は大負けに負けよつて、二十圓や。……それから、この店の名義を切り替へて福造の名にすること。時々浪花節や、活動寫眞や、仁和賀芝居の興行をしても、ゴテ〳〵言はんこと。これだけを承知して呉れるんなら、元の鞘へ納まつてもえゝ、自分の拵へた借錢は自分に片付けるよつて、心配せいでもよい。……長いことゴテ〳〵書いてあるが、煎じ詰めた正味はこれだけや。……ああさう〳〵、それから鱧の皮を一圓がん送つて呉れえや。」と、手紙を披げ〳〵言つて、逆に卷いて行つたのを、ぽんと其處へ投げた。

怖い顔をして、ヂッと聽いてゐたお梶は、氣味のわるい苦笑を口元に湛へて、

「阿呆臭い、それやと全で此方からお頼み申して、戻つて貰ふやうなもんやないか。……えゝ加減にしときよるとえゝ。そんなことで此方が話に乘ると思うてよるのか知らん。」と言ひ〳〵、孫を側の座蒲團の上へ寢さし、戸棚から敷蒲團を一枚出して上にかけた。細い寢息が騷がしい店の物音にも消されずに、スウスウと聞えた。

「奈良丸を千圓で三日買うて來て、千圓上つて、損得なしの元元やつたのが、福造の興行物の一番上出來やつたんやないか。……其の外の口は損ばつかり。あんなことに手を出したらどんならん。……一切合財興行物はせんこと。店の名義は戻つてから身持を見定め、自分の借錢のかたを付けてから、切り替へること。それから、何うあつても家出せぬといふ一札を書くこと。……これだけを確かり約束せんと、今度といふ今度は家の敷居跨がせん。」

もう四五年で七十の鐏を取らうとする年の割には、皺の拗い、キチンと調つた顔に力んだ筋を見せて、お梶は店の男女や客にまで聞える程の聲を出した。

銀場のお文は知らぬ顔をして帳面を繰つてゐた。

六

夜も十時を過ぎると、表の賑ひに變りはないが、店はズッと閑になつた。

「阿母アはん、今夜泊つて行きなはるとえゝな。……今から去なれへん。」

漸と自分の身體になつたと思はれるまでに、手の隙いて來たお文は、銀場を空にして母の側に立つた。

「去ねんこともないが、寢た兒を連れて電車に乘るのも敵はんよつて、久し振りや、そんなら泊つて行かう。……をッさんは、

もう去ぬか。」

其の日の新聞を披げた上に坐睡をしてゐた源太郎は、驚いた風でキョロ〳〵して、

「あゝ、去にます。」と、手を伸ばして姉の前の煙草入を納ひかけたが、煙管は先刻から煙草ばかり吸ひ續けてゐる姉が持つたまゝでゐた。

「狹いよつてなア此處は、……此處へ寢ると、昔淀川の三十石に乘つたことを思ひ出すなア。……食んか舟でも來さうや」と、お梶は煙管を弟に返し、孫の寢姿に涙うて横になつた。

「をッさん、善哉でも喰べに行きまへうかいな。……久し振りや、阿母アはんに一寸銀場見て貰うて。……なア阿母アはん、よろしおまッしやろ。」

何もかも忘れて了つたやうに、氣輕な物の言ひやうをして、お文は早や身支度をし始めた。

「いといで。眼がわるなつたけど、こなひだまでしてた仕事やもん、閑な時の銀場ぐらゐ、これでも勤まるがな。」と、身を起して、お梶はさッさと銀場へ坐つた。

「またもや御意の變らぬ中にや、……をッさん、さア行きまへう。」

元氣のよいお文を先きに立てて、源太郎は太い腰を曲げながら、ヨタ〳〵と店の暖簾を潛つて、賑やかな道頓堀の通りへ出た。

「牛に牽かれて善光寺參り、ちふけど、馬に牽かれて牛が出て行くやうやな。」と、お梶は眼をクシャ〳〵さして、銀場の明るい電燈の下に微笑みつゝ、二人の出て行くのを見送つた。

七

筋向うの芝居の前には、赤い幟が出て、それに大入の人數が記されてあつた。其處らには人々が眞ッ黑に集まつて、花電燈の光を浴びつつ、繪看板なぞを見てゐた。序幕から大切までを一つ一つ、俗惡な、浮世繪とも何とも付かぬものにかき現した繪看板は、芝居小屋の表つき一杯に掲げられて、竹に雀か何かの模樣を置いた、縮緬地の幅の廣い緣を取つてあるのも毒々しかつた。

お文と源太郎とは、人込みの中を拔けて、褄を取つて行く紅白紛の濃い女や、萌黄の風呂敷に箱らしい四角なものを包んだのを提げた女やに擦れ違ひながら、千日前の方へ曲つた。

「千日前ちふとこは、洋服着た人の滅多に居んとこやてな。さう聞いてみると成るほどさうや。」と、源太郎は動もすると突き當らうとする群集に、一人でも多く眼を注ぎつゝ言つた。

「兵隊は別だすかいな。皆洋服着てますがな。」

例もの輕い調子で言つて、お文はにこ〳〵と法善寺裏の細い路次へ曲つた。其處も此處も食物を並べた店の多い中をとつて、この路次へ入ると、奥の方からまた食物の匂が湧き出して來るやうであつた。

路次の中には寄席もあつた。道が漸く人一人行き違へるだけの狹さなので、寄席の木戸番の高く客を呼ぶ聲は、通行人の鼓膜を突き破りさうであつた。藝人の名を書いた庵看板の並んでゐるのをチラと見て、お文は其の奥の善哉屋の横に、祝つたやうにして看板に置いてある、大きなおかめ人形の前に立つた。

「このお多福古いもんだすな。何年經つても同じ顔してよる……大かたをッさんの子供の時からおますのやろ。」

妙に感心した風の顔をして、お文はおかめ人形の前を動かなかつた。笑み滴れさうな白い顔、下げ髪にした黒い頭、青や赤の着物の色どり、前こゞみになつて、客を迎へてゐる姿が、お文の初めてこの人形を見た幾十年の昔と少しも變つてゐないと思はれた。

子供の折、初めてこのお多福人形を見てから、今日までに、隨分さま〳〵のことがあつた。とお文はまたそんなことを考へて、これから後、この人形は何時までかうやつて笑ひ顔を續けてゐるであらうかとも思つてみた。

「死んだおばんが、子供の時からあつたと言うてたさかい、餘ッぽど古いもんやらうな。」

かう言つて源太郎も、七十一で一昨年亡つた祖母が、子供の時にこのおかめ人形を見た頃の有樣を、いろ〳〵想像して見たくなつた。其の時分、千日前は墓場であつたさうなが、この邊はもうかうした賑やかさで、多くの人たちが、店に並んだ食物の匂を嗅ぎながら歩き廻つてゐたのであらうか。其の食物は皆人の腹に入つて、其の人たちも追々に死んで行つた。さうして後から後からと新らしい人が出て來て、食物を拵へたり、並べたり、歩き廻つたりしては、また追々に死んで行く。それをこのおかめ人形は、かうやつて何時まで眺めてゐるのであらう。

こんなことを考へながら、ぼんやり立つてゐる中に、源太郎はフラ〳〵とした氣持になつて、

「今夜火事がいて、燒けて碎けて了ふやら知れん。」と、自分の耳にもハッキリ聞えるほどの獨り言をいつて、自分ながらハッと氣がついて、首を縮めながら四邊を見廻した。

「何言うてなはるのや。……火事がいく、何處が燒けますのや、……しようもない、確かりしなはらんかいな。」

お文はにこ〳〵笑つて、叔父の袂を引ッ張りつゝ言つた。

「さア早う入つて、善哉喰べようやないか。何ぐづ〳〵してるんや。」と、急に焦々した風をして、源太郎は善哉屋の暖簾を潛らうとした。

「をッさん、をッさん……そんなとこおきまへう、此方へおいなはれ。」と、お文はぎッさと歩き出して、善哉屋の筋向うにある小粹な小料理屋の狹苦しい入口から、足の濡れるほど水を撒いた三和土の上に立つた。小ぢんまりした沓脫石も、一面に水に濡れて、切籠形の燈籠の淡い光がそれに映つてゐた。

「あゝ、御寮人さん、お出でやす。まアお久しおますこと、えらいお見限りだしたな。さアお上りやす。」

赤前垂の肥つた女は、食物を載せた盆を持つて、狹い廊下を通りすがりに、沓脫石の前に立つてゐるお文の姿を見出して、ペラ〳〵と言つた。

「上らうと思うて來たんやもん、上らずに去ぬ氣遣ひおまへん。」

かう言つて駒下駄を沓脫石の上に脫ぎ棄てたお文の背中を、ポンと叩いて、赤前垂の女は、

「まア御寮人さん。……」と、仰山らしく呆れた表情をしたが、後から隨いて入つて來た源太郎の大きな姿を見ると、

「お連れはんだッか。何うぞお上り。さア此方へお出でやへえ

な。」と、優しく言つて、窮屈な階子段を二階へ案内した。

茶室好みと言つたやうな、細そりした華奢な普請の、階子段から廊下に、大きな身體を一杯にして、ミシ〳〵音をさせながら、頭の支へさうな低い天井を氣にして、源太郎は二階の奥の方の鍵の手に曲つたところへ、女中とお文との後から入つて行つた。

「善哉なんぞ厭だすがな。こんなとこへ來るといふと、阿母アはんが怒りはるよつて、あゝ言ひましたんや。」

向うの廣間に置いた幾つもの衝立の蔭に飲食してゐる、幾組もの客を見渡しつゝ、お文はさも快ささうに、のんびりとして言つた。

「御寮人さん、お出でやす。」

「御寮人はん、お久しおますな。」

なぞと、痩せたのや肥えたのや、四五人の赤前垂の女中が代る代る出て來た。其の度にお文が白いのを鼻紙に包んで與るのを、源太郎は下手な煙草の吸ひやうをしながら、眼を光らして見てゐた。

肥つた女中は、チリン〳〵と小さく鈴の鳴るやうな音をさして、一つ〳〵捻つた器具の載つてゐる杯盤を運んで來た。

「まア一つおあがりやへえな。」と、女中は盃洗の底に沈んでゐた杯を取り上げ、水を切つて、先づ源太郎に獻した。源太郎は酌された酒の黄色いのを、しッぽく臺の上に一寸見たなりで、無器用な煙草を止めずにゐた。

「こんな下等なことやよつて、重亭や入船のやうに行きまへんが、お口に合ひまへんやろけど、まアあがつとくなはれ。……なア姐はん。」

自分に獻された初めの一杯を、ぐッと飲み乾したお文は、かう言つてから、二度目の酌を女中にさせながら、

「姐はん、このお方はな、こんなぼくねん人みたいな風してはりますけど、重亭でも入船でも、それから富田屋でも皆知つてやはりますんやで。なか〳〵隅へ置けやへんで。」と、早や醉ひの廻つたやうな聲を出した。

「ほんまに隅へ置けまへんな。粋なお方や、あんたはん一つおあがりなはッとくれやす。」と、女中は備前燒の銚子を持つて、源太郎の方へ膝推し進めた。

「奈良丸はんと一所に行かはりましたのやもん。藝子はんでも、八千代はんや、吉勇はんを、皆知つてやはりまッせ。」

かう言つてお文は、夫の福造が千圓で三日の間奈良丸を買つて、大入を取つた時、讃岐屋の旦那々々と立てられて、茶屋酒を飲み歩いた折のことを思ひ出してゐた。さうして叔父の源太郎が監督者とも付かず、取卷とも付かずに、福造の後に隨いて茶屋遊びの味を生れて初めて知つたことの可笑しさが、今更に込みあげて來た。

「阿呆らしいこと言はずに置いとくれ。」と、源太郎も笑ひを含んで漸く杯を取り上げ、冷めた酒を半分ほど飲んだ。

雲丹だの海鼠腸だの、お文の好きなものを少しづつ手鹽皿に取り分けたのや、其の他いろいろの氣取つた鉢肴を運んで置いて、女中は暫く座を外した。お文は手酌で三四杯續けて飲んで、源太郎の杯にも、お代りの熱い銚子から波々と注いだ。

「お前の酒飲むことは、姉貴も薄々知つてるが、店も忙しいし、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com